

Do Something!

ライフスタイル デザイン マガジン
[ドゥサムシング!]

20th docomo

Lifestyle Design Magazine 2013 SPRING vol.33
for docomo PREMIER CLUB MEMBER

ものづくりの国、
手仕事の里を訪ねて。
The craftsmanship shows us our future.

巻頭特写
色あふれる島、紅型輝く、琉球・首里へ。
ニッポンの永遠のご馳走、お節
春を迎える。気分すっきり収納術
ドコモクラウドの世界

【 Shigeki Matsuoka 】

Japanese craftsman



「技術と情熱は、時代のニーズに合わせて常に更新していくことが大切です」



4. 人と人の自然な距離感を意識した「LOVE CHAIR」は、優しい“間”をつくる。5. 木の反りをそのまま活かしたテーブル。「生きているなら反発してみろって感じです」

具は、人間の命が果てた後も生きる。
さらに松岡さんは、その命を先につなごうとしている。
「自分の仕事の終着点は、百年後、二百年後へと俺たちのルーツを継いでくれる家具職人を育てて、その子たちが伸び伸びと仕事できる環境をつくることです。木工家具を何十年も使ったら、やっぱりメンテナンスは必要になってくる。そのときに、修理できる環境がないから捨て

なきやいけないっていうのは、つくり手としてもものすごく無責任だなんて。いつの時代にもそれを修理する環境がないと、つくり手としての責任を果たしてないなと思うんで。消費者の中にコマ数パーセントいる、情熱の質量を感じるものを使いたいって考える人たちの気持ちに、ちゃんと応えたいんですね」
KOMAは今年で設立10周年を迎えたが、松岡さんの視線は、もっともっと先を見据えている。



1. 使い慣れた道具で命をつくる。2. 盟友・亀井敏裕さんをはじめとする、信頼できる仲間たち。仕事の終着点は「人を育てること」。3. 「基本的にはワクワクすることしかやりません」と話す松岡さん。仕事と遊びの狭間を生きる

モノづくりの国
ニッポンの
職人さん

craftsman #004



profile

1977年、東京都生まれ。2000年に日田工芸株式会社に入社して家具職人としてのいろはを学び、2006年独立。現在、KOMMAの代表取締役。www.komma.jp

「本

当に何も考えてなかったんです。今思うと無謀

(笑)。運と人に助けられて、どうにか生きてこれたっていう」

家具職人・松岡茂樹さんがデザインワークスKOMMAを立ち

上げたのは2003年2月。それまで勤めていた日田工芸で

は稼ぎ頭として活躍していたが、2002年の11月の

ある夜、仕事帰りの電車ですべてのものを置いて、家に着いて

独立を思いつき、家に着いて

玄関のドアを開けた瞬間、妻に独立を宣言する。

その後、さっそく工房を立ち上げたものの、最初の2年間は

「家賃も払えないくらいに貧乏でした」。しかし、コンペティ

ションや百貨店で作品展示の機会を得て、松岡さんの名前は

早々に注目を集めるようになる。「修業時代、基礎となる技術は

徹底的に反復練習して磨いたし、クリエイティブな面で、誰にも

つくれないものをつくれるという自信もありました。でも、どんなに技術があっても、情熱がないといいものはつくれない。

想いを込めて……それしかないし、それが一番大事な。そこが評価されたのならうれしいですね」

松岡さんがつくる木工家具は、イスとテーブルがメイン。木と向き合うことが毎日の仕事だが、その対峙の仕方にも独自の哲学

がある。

「木は生き物だ。つくって使う人もいるけど、製材された板はただの素材でしかないって考えて。ただ、木目なんかにはそれ

ぞれ表情があるから、『コイツ、生きてきたんだな』っていうのはわかる。俺の仕事は、素材の木に意匠を凝らしてより美しいものにするんですね」

鉄が錆び、プラスチックが割れるように、どんな素材でも年を経れば変化する——松岡さんはそう考える。また、みずから手がけたものをあくまで商品として捉え、使い手に作品性／作家性を押しつけないバランス

感覚の良さも持ち合わせている。

現在は、舞い込むオーダー仕事に打ち込みつつ、海外での作品展示に向け、日本のルーツを感じさせる床几（しこ）をベースにしたプロダクトの制作にも動しむ。

「日々、研がれていく感覚があります」と笑顔をみせるが、一時期、身の周りにあるすべての物質がいざれゴミになるという考えに固執して悩み、日本を代表するトップクリエイターに打ち明けたこともあった。

「一所懸命ものづくりをしても、結局すべてはゴミになるのかなって思っちゃったというか。そして、『バカ野郎、命だよ。命を与えるのがものづくりだよ』って、『買ったくれた人が修理してでも使いたい、子どもや孫にも継がせたいって思ってくれたら、それは命が吹き込まれているってことでしょ』って言われて、ああ、なるほどなって。そういう意味では、おこがましくて大げさだけど、命をつくらうって思ってますよ」

素材に命を吹き込むのが職人の仕事。そうしてつくられた家

具職人

具職人

具職人

具職人

家具職人

木という素材に全精力を傾けて命を吹き込む。それが俺の仕事です

craftsman

【 Shigeki Matsuoka 】



松岡茂樹さん

25歳で旧友とともに工房を立ち上げ、柔軟な発想で家具をつくり続けてきた松岡さん。

木という素材に命を吹き込みながら、自分の死後に活躍する後継者たちの姿に想いを馳せる。

スケールの大きなクリエイターに、じっくりと話を聞いた。

text by Tsutomu Yoshida photos by Ayako Asami